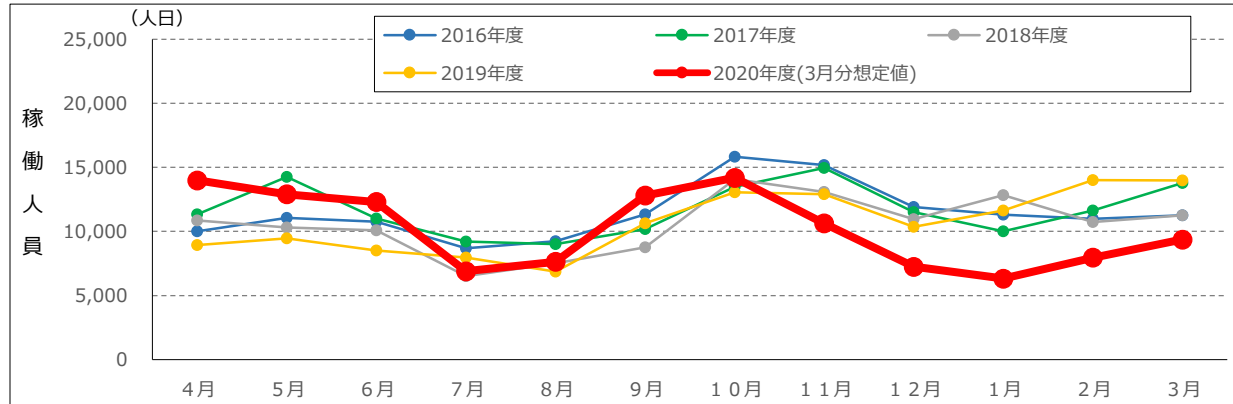


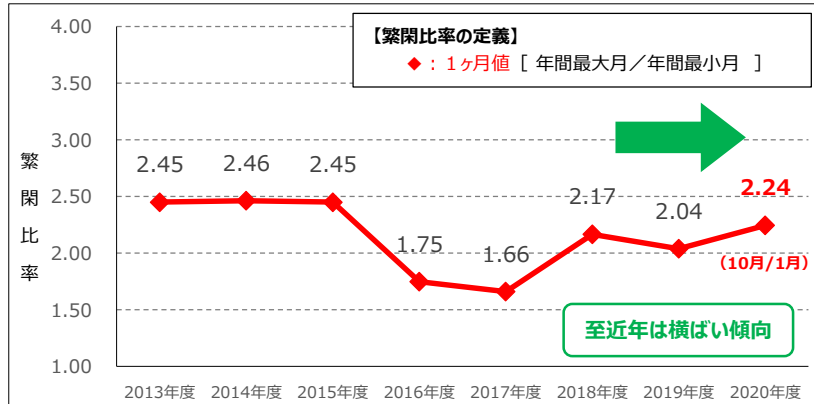
工事量の平準化について（高所作業員）

1. 実績の推移について

(1) 2020年度稼働人員の実績と至近年の推移



(2) 稼働人員による繁忙比率の推移

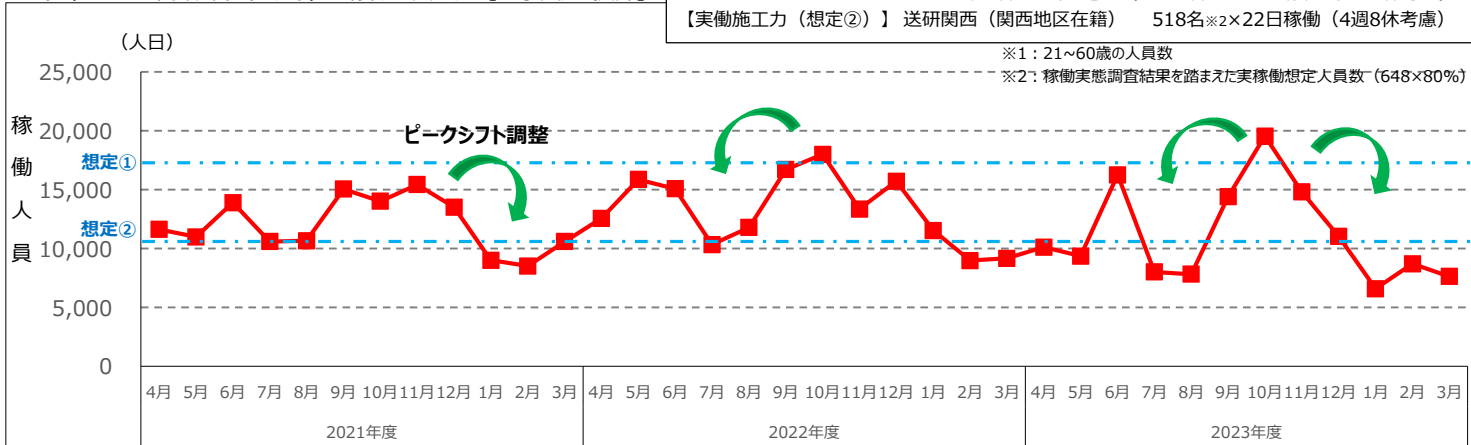


【2020年度の稼働状況】

- 春の稼働（4月～6月）
 - ▶ 停電調整・工程調整による前年度からの繰延べや大型工事での工法見直しにより、全体的に平準化・高稼働となった。
- 夏の稼働（7月～9月）
 - ▶ 設備工事は、夏季停電工事や単独除却等により底上げを図るも概ね例年と同等程度、修繕工事は近年の予算低水準に伴い物量が回復せず、近年同様7,8月は低稼働となった。
- 秋の稼働（10月～12月）
 - ▶ 年初では高稼働予想であったが、用地事情等やむを得ない工程の後ろ倒しや施工班との工程調整による繰延べにより、全体的な稼働は想定を下回った。（10月がピーク稼働）
- 冬の稼働（1月～3月）
 - ▶ 設備工事の冬停電件名が例年より少なく年初から低稼働予想であったが、用地事情等やむを得ない工程の後ろ倒しや厳冬による工程見直し等により、全体的に低稼働となった。（1月が最少稼働）
- 通年の稼働
 - ▶ 設備工事においては、前年からの繰り延べ等もあり例年に比べ春稼働が高い状況であったが、停電状況や用地事情等による工程後ろ倒しにより秋～冬稼働は近年で最少水準となった。また、修繕予算水準の回復が見通せない中で全体物量が減少し、近年、夏場低稼働の底上げに影響しており、繁忙比率は横ばい傾向となっている。引き続き、夏場停電運用の見直しを最大限活用し、設備工事の夏場シフトを推進していく。

2. 2021年度以降3か年の平準化計画について

(1) 2021年度以降（3か年）の稼働人員想定 [工事費から換算]



【実働施工力 (想定①)】 送研関西 (関西地区在籍)
+ 関西地区外在籍 (関電が主) 659名※1×26日稼働 (4週4休考慮)
【実働施工力 (想定②)】 送研関西 (関西地区在籍) 518名※2×22日稼働 (4週8休考慮)

<2021年度の平準化計画見通し>

- 春（4月～6月）の稼働向上**
特に設備工事において、年初立上げを推進し、4月からの稼働向上を図る。
- 夏（7月～8月）の稼働向上**
設備工事の早期着手および夏場停電運用の見直しにより秋から夏稼働へのシフトを図るとともに、修繕工事の夏場計画件名については稼働維持に向けて工程を管理する。
- 秋（10月～11月）の平準化**
可能な限り夏・冬へのピークシフトを調整するとともに、期中で秋に工事が流れて、ピークが立たないよう、厳格に工程管理する。
- 冬（1月～2月）の稼働向上**
上期で工程が遅延した件名や、期中発注件名については実施時期を冬で調整し、稼働向上を図る。

<2022年度以降の平準化計画>

大型工事の工程調整により秋→夏へのピーク調整を進めるが、冬季への調整は難しいため、支店件名を中心に冬稼働の底上げ調整による通年の平準化を強力に推進する。